

## 津軽デジタル風土記、はじめの一步 ―調印式・記念講演レポート―



調印式の様子

平成29年7月15日(土)、弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにて、「津軽の魅力と文化を世界に発信! -古典籍・歴史資料のデジタル公開に向けて-」と題し、「津軽デジタル風土記の構築」プロジェクトの推進に関する覚書の締結式ならびに記念講演会が開催された。「津軽デジタル風土記」とは、当館が中心となって推進している「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」で実施する「文献観光資源学」の柱となる事業である。津軽の複数の機関と協力体制を築きながら、今後3年の間に新たなデジタル資料の利活用のあり方を提示していく意欲的な計画であり、この締結式はその船出となる重要な意味をもつ。

当日は、弘前大学理事(研究担当)・副学長の開会のことばに続き、当館副館長谷川恵一氏による、「歴史的典籍NW事業における文献観光資源学の取組」、さらに弘前大学教職大学院教授瀧本壽史氏による「『津軽デジタル風土記』構築への取組」という、本プロジェクトの概要説明がなされた。要点としては、従来、紙媒体で限られた場所(個人、研究機関、大学など)に集中していた地域資史料、すなわち書籍・古地図、さらには固定的な碑文などをもデジタル化しアクセスを容易にするとともに、紙媒体と併用することによって再資源化していこう、というものである。地域の価値を再発見していくためのユーザ参加型ツールを構築しながら、現代の視点から地域情報を再統合する、これが本プロジェクトの理念である。

つづいて、プロジェクト参加機関である弘前市教育委員会・弘前大学教育学部・弘前大学人文社会科学部・青森県立郷土館、そして国文学研究資料館の各長が壇上一同に会し、調印式が行われた。それぞれの有する資料とこれまで培ってきた実績を合わせることで、新たなデジタル環境の構築、そしてそれを地域の資源として生かしていく、そのような期待に満ちあふれていた。

以上が第一部であるが、第二部では、弘前大学名誉教授長谷川成一氏による「森林資源の活用から見た近世津軽-白神山地・岩木川・弘前城下-」、当館館長ロバート キャンベル氏による「『弘前藩庁日記』に刻まれた江戸のリアリティ」の二つの記念講演が行われた。それぞれ、津軽に関する資料に基づきながら歴史と文化双方に触れる興味深い内容であったが、前者は山鹿素行の津軽領観という「他者の目」(外から見た目)に触れながら、津軽の自然、とりわけ材木の特色とそれに関わる人々の営為について、一方後者は、津軽の藩校・稽古館教授黒滝藤太が昌平齋において遭遇した殺人事件を『弘前藩庁日記』から再現するという、津軽から「外への目」を通じた点で両者が呼応しているようであった。

この後、記者会見も開かれたが、そこでは、本プロジェクトがこれまで大学が行ってきた活動の延長上にある「時宜を得たもの」であり、まさに機が熟したとの発言や、発信はもちろん、「交信」(コミュニケーション)が求められているとのコメントもあった。また、本プロジェクトがなぜ津軽を対象としたのか、という新聞記者からの質問に対し、当館館長が「組織の域を超えられる文化的土壌があったこと」と応じた点は、当日の調印の実現を象徴する言葉であったように思う。



翌日は、各自関連機関を巡見したが、筆者は青森県立郷土館を訪れ、改めて津軽の資料の多彩さと面白さを実感した。

スタートしたばかりで未知数な部分が多いものの、既成の価値観に縛られずに、資源を活きたものとして利活用できる「場」と具体的な提案を、参加機関のスタッフがチームとして築きあげていきたいと考えている。

(木越 俊介)